

## 【研究ノート】

# オルテガ研究の覚え書き（7）

藤 本 吉 藏

### 目 次

#### I プロローグ

#### II 『人と人々 (El hombre y la gente)』の内容鳥瞰

#### III 『人と人々 (El hombre y la gente)』の内容整理

#### IV エピローグ

#### 注

## I プロローグ

『オルテガ研究の覚え書き』という一連の線上に沿って、直近に取り組できたテーマは、『現代の課題 (El tema de nuestro tiempo)』への附録たる『アインシュタインの理論の歴史的意義 (El sentido historico de la teoria de Einstein)』の内容鳥瞰である<sup>(1)</sup>。結果的に、その作品は、ガリレイやニュートン流の自然の数学化乃至デカルトやカントの合理主義（理性主義）がもたらした現実的生の価値喪失<sup>(2)</sup>をスペイン社会疾患の深層に蔓延の源泉として明確に提示したものと解し得た。また、その救済の為の処方箋として、パースペクティヴをアインシュタイン相対性理論 (la relatividad)<sup>(3)</sup>との絡みで科学的に体系づけ、存在する総てのものを存在者と存在の関係に還元するという立場で、理性に対する生の復権をもたらす世界を描き出そうと試みたものと解しえた。正しくここに、スペイン人の救済という命題と、我々の個人的生を取り巻く環境の確認並びに前景から後景までの多様なパースペクティヴによる環境の再摂取要請とが直結するオルテガ思想の仕組みが明瞭になるのである<sup>(4)</sup>。とはいえ、

オルテガが目論むこの姿勢を更に十全に理解する為には、当然のこと乍ら、彼が思索している我々の生を取り巻く社会環境について、言い換えれば彼が描く社会学的思想の構想について吟味する必要がある。

ところで、オルテガがものした社会思想に関する文献としては、年代順にいった、彼自身の基本理念を内包せしめている「個性的批評について (De la crítica personal)」(1902)<sup>(5)</sup>、労働組合運動或いはカタルーニャやバスク地方の自治権要求運動の狂騒や J. A. プリモ・デ・リベラ (José Antonio Primo de Rivera) 独裁制が抬頭 (1923-30) し始めた<sup>(6)</sup> 背景下で作成した『無脊椎のスペイン (España Invertebrada)』(1921) とそれに続く『大衆の反逆 (La rebellion de las masas)』(1930)<sup>(7)</sup>、1939 年より国内外で行った講演の原稿やマドリードの人文文学研究所 (El Insutiruto de Humanidades) で開催した (1949 ~ 1950)<sup>(8)</sup> 講座資料を基に整理した『人と人々 (El hombre y la gente)』(1957 年に遺稿として出版された) を指摘できよう。

扱て、オルテガの社会学について吟味する場合、無論、彼が 1914 年に結成した「スペイン政治連盟 (La legia de educación política española)」やその記念講演「旧政治和新政治 (Vieja y nueva politica)」の開催といった現実的政治活動<sup>(9)</sup>、或いはまた、彼が形而上学的立場から「歴史的並びに社会的生の構造 (Estructura de la vida historica y social)」と題して指導したマドリード大学文学部に於けるゼミナール (1934 ~ 1935)<sup>(10)</sup> にも注視する必要があるとは承知するが、本稿では、他の『覚え書き』の場合と同様に時間と紙幅を考慮に入れて、彼の諸社会学的文献の中から、特に、『人と人々 (El hombre y la gente)』だけを採り上げたいと思う次第である。というのは、この作品こそは、彼の社会学に関する基本的見解を把握する上で最も適した文献であると推定し得るからである。それは、『体系としての歴史 (Historia como sistema)』(1941) のⅧで、社会を構成するレパートリー、生形式と慣習 (una forma de vida y usos)、個人的生と集团的生 (la vida personal y la vida colectiva) といった社会学の問題を論じた箇所注を付け、『人と人々 (El hombre y la gente)』という標題で近く出版予定の作品の中で真剣に社会学と取り組むつもりであるとか、

その場合、従来のように真に根源的な問題が回避されるようなことはないであろう<sup>(11)</sup> という一節説を見出すことでも裏付けられ得ることでもある。

## Ⅱ 『人と人々 (El hombre y la gente)』の内容鳥瞰

この作品の構造は12の項目からなっている。即ち、1. 自己沈潜と自己疎外 (Ensimismamiento y alteración)<sup>19-44</sup>, 2. 個人的生 (La vida personal)<sup>45-62</sup>, 3. 「我々の」世界の構造 (Estructura de <<nuestro>>mundo)<sup>63-78</sup>, 4. 「他者」の出現 (La aparición del <<otro>>)<sup>79-100</sup>, 5. 対個人的生。我々—汝—我 (La vida inter-individual. Nosotros-tú-yo)<sup>101-117</sup>, 6. 再び他者たちと我について。彼女への短い旅 (Más sobre los otros y yo. Breve excursión hacia ella)<sup>119-143</sup>, 7. 他者という危険並びに我という驚き (El peligro que es el otro y la sorpresa que es el yo)<sup>145-174</sup>, 8. 突然人々が現れる (De pronto aparece la gente)<sup>175-179</sup>, 9. 挨拶に関する考察 (Meditación del saludo)<sup>181-195</sup>, 10. 挨拶に関する考察。語源学的動物たる人間。慣習とは何か? (Meditación del saludo. El hombre, animal etimológico. ¿Qué es un uso?)<sup>197-223</sup>, 11. 人々の言説即ち言語。新たな言語学に向かって (El decir de la gente: la lengua. Hacia una nueva lingüística)<sup>225-257</sup>, 12. 人々との言説即ち「世論」, 社会的「しきたり」。国家権力 (El decir de la gente: las <<opiniones públicas>>, las <<vigencias>> sociales. El poder público)<sup>259-272</sup> で構成されている。

扨て、本稿では、各項目で何が論じられているのか、またこの作品でそれらがどのような役割を果たしているのかを俯瞰し、最終的にオルテガ社会学的思想の特徴を筆者なりに確認したいと思う次第である。

### 1. 自己沈潜と自己疎外 (Ensimismamiento y alteración)

この項目は、人々が、本質的に社会的なるものという概念を含だ術語<sup>(1)</sup>について明確な意味を欠きながら議論し、混乱に陥っているという書き出しで始まっている。そして、この状況を打破する為に、諸文献や社会学者達の見解に救いを求めたところ、殆どの文献が社会乃至社会学的なるものとは何かについ

て語っていないばかりか、諸社会学者<sup>(2)</sup>に至っては、社会的事実の基礎たる基本的現象についての充分な究明さえ試みようとしていない事実直面したと吐露し、そこで、社会学的なものについての明澄な観念の探究に自ら乗り出す決意を表明している。

ところで、オルテガにとっては、最近(つまり1930年代である)殆ど世界全体が疎外されており(*está alterado*)、人間はこの自己疎外(*la alteración*)の状況の下で、言い換えれば、人々を盲目状態にし且つ機械的な行動を強いる環境の中で、自分の最も本質的な属性—自己自身が真理を求めて思索したり自己内部にこもるという可能性—を喪失している情勢に映る。それは、正しく動物園の猿の如く、常に自分以外の他者つまり周囲の事物によって支配され続けなければならない存在状況にあることに他ならない。しかし、オルテガ見解では、抑も人間は、事物に対する関心を停止させて自己自身に没頭する所謂自己に沈潜する(*ensimismarse*)ことが出来る点で猿の存在とは異なる<sup>(3)</sup>。しかも、自己沈潜し得るということは、人間に二つの能力が含んでいることを推定し得る。一つは致命的な危機を招来せずに周囲世界を無視することの出来る能力であり、他は世界から抜け出たときに自己の存在を立脚させる場を持っていることである。世界のどこにも位置せずにいるという仮定は、観念より成り立っている自分自身の内部世界を構成しているということに他ならず、人間はこの内部世界から外部世界に戻ってゆくのである。そしてこのとき、人間は、自分自身(*chez soi*)の意思と計画を実現する為に主役として戻るのである。つまり、自分自身を他者の中で巧妙に投影できるように、他者即世界を少しずつ彼自身に変化させようとするといつてよい。

扱て、こうした角度から眺めた人間の軌跡図を辿れば、人間は、動物と変わらず、環境の中にその一部として嵌め込まれて生きている→「周囲の物が彼を動かしたり操ったりすることを止めて休息を与えるやいなや、彼は原始的的自己沈潜を図る＝彼の内部から沸き出る考えに注意を固定しつつ、瞬間的で粗雑な最初の予定行動の素描を可能にする＝人間的生を動物的生から根本的に区別する」→彼は物に対する計画でもって自己の周囲に僅かな変化を悖らす→諸物

の彼への圧迫は軽減する→彼に更なる頻繁な自己沈潜の繰り返しを可能にする、という行程を描くことができる。斯くして、この構図より、人間の歴史を通じて周期的に繰り返される三つの契機があると推断できる。即ち、1. 自己疎外、2. 自己沈潜、3. プラクシス (prâxis) である<sup>(4)</sup>。つまり、我々は、考える為に生きるのではなく、存在し或いは生き続ける為に考える (no vivimos para pensar sino que pensamos para lograr subistiro o pervivir) といってもよい。言い換えれば、人間は一義的に且つ根本的に行動であると言い得るのである。このことは、結果的に、行動 (la acción) から深惟 (la contemplación) を分離させる「主知主義の逸脱 (la aberración intelectualista)」<sup>(5)</sup> 即ち最初は理性 (raison)、次に啓蒙精神 (ilustración)、最後に文化 (cultura) という名の下に、知性の神格化に立つ思惟方法に対して拒絶を迫る重要なポイントである。オルテガの分析的立場では、この思考は、古代ギリシャから 20 世紀初頭にかけて継承されてきた西洋人の伝統的思考であるが、人間の感受性を麻痺させ、自己沈潜を避け、完全な自己疎外に身を任せようとする姿勢を導くゆえ、受け入れ難いのである。彼にとっては、抑も人間は思考能力を授けられたのではなく、訓練や教育を通じて作り上げてきたのである<sup>(6)</sup>。人間は安全な形で人間であるのではなく、次の瞬間に何が起こるか解らず、絶えず非人間化される危険な冒険の中に生きている。我々の人格的個性というものは、決して実現されないものであり、人を駆り立てるユートピアなのだ。歴史は、後退・退廃・退化を数え切れない程我々に語っている。最も根本的な後退は、全面的な人間喪失、自己疎外への後退である。彼オルテガにいわせると、我々が現代価を支払っているのは、正にこうした安全性に対してなのである。

ところで、オルテガは、主知主義の逸脱に続いて、深惟を放棄して純粹行動を神聖視する主意主義の逸脱 (la aberración voluntarista, que se exonera de la contemplación y diviniza la acción pura) が起こったことを指摘している。その逸脱とは人間が一義的に行動であるとする先の理論のまちがった解釈の一つに他ならず、彼は、ヨーロッパ社会が 20 世紀に入ってから社会闘争とそれに続く戦争 (las luchas y las guerras consiguientes) で自己沈潜の能力が失われ、自

己疎外の極端な形である麻痺状態に陥っていると分析しているのである。そこでは、自己疎外の請負師たるデマゴグ達 (los demagogos) が、各自の内省 (reflexión) や人格再建 (reconstruir persona) を妨げて人々を群衆のままに留まらせようと努めながら、真理に対する奉仕を捨てて神話を持って事を処理する、といった純粹行動が神聖化された時代の情景を縷述している姿を見て取れる。斯くの如き、深惟や自己沈潜との正常な連関から逸脱した純粹行動は、愚行の連鎖つまり一つの理に合わない態度と正反対の理に合わない態度の出現といった連鎖反応を産み出す。そういう訳で、西洋においては、理性が失われた政治の事柄が極端にまで進んでしまい、結果的に誰にも道理があると主張するまでに至ってしまった。それ故、こうした循環を断ち切って自己沈潜を図り、新しい人間的計画を図る必要がある<sup>(7)</sup>。自己疎外への扇動に対抗して、足下に過去を充分に感じて生きる為に必要なアイデアの中で自己を完成させなければならない。それ故こそ、オルテガは緊急なテーマとして「社会とは何か」を浮かび上がらせているのである。

## 2. 個人的生 (La vida personal)

第2項目は、歴史上繰り返される自己喪失と自己再発見の可能性は、人間の構成要素であるという視座の下に、厳格に「社会現象 (fenómenos sociales)」と呼ぶ以外にない事実を見いだしたいという前項目で立てた方針の再確認で始まっている。しかも、ここでも作業は、究極的実在の領域へ、即ち根本的で必然的にその上に他のあらゆる実在が現れるような環境に引き返して見ることでなければならないと強調している。オルテガにとって、この根本的実在 (realidad radical) こそは、各自の人間的生 (la vida humana) であり<sup>(1)</sup>、他の人達の生ではないという確信に立ってのことである。ここでいう他人の生とは、単なる景観 (mero espectáculo) つまりある種の外的兆候乃至推測といってよい。各人の生は、虚構を許さないし、疑いの余地なき真正という意味で根本的実在と命名し得る理由がある。また、それを根本的実在と呼ぶのは、何らかの形で我々自身の生という境界の中に現れなければならないという意味において、それが根 (raíz) で

あるとみなし得るからである。従ってこの根本的實在は、利己的(egóista)或いは「独我論的(solipsista)」という範疇とは縁がないものであり、本質的に、そこに含まれる他の全ての實在が自己を現す為に提供され解放された区域乃至舞台とってよからう。

扨て、こうした私即ち自我としての人間は、常に生きながら存在するものである。我々の生は、受動的に他から定められている訳ではなく、課題として自分の為に何かを作り上げていかなければならないものなのである<sup>(2)</sup>。我々は、その中で生きなければならない環境内で、各自の多様に可能な行動を毎瞬間自己責任の下に選択しなければならない。存在しながら存在を選択しなければならない義務を負った唯一の實在であるといえる。正に人間の生つまり各自の生は<sup>(3)</sup>、根本的に孤独なのである。それは、現実には彼しかないということに基づいているのではなく、実に世界とそこに含まれる全てのものがあるということであり、根本實在の中に囲まれて各自がいるということを意味する。

ところで、上述の視点から、世界にある全ての物及び存在者は、我々の周囲を形作り、我々の環境をつなぎ合わせているとってよい。しかしそれらは、否定的で敵意に満ちた要素でなる絶対的な他者という立場で決して溶け合うことはない。我々は、それを異質のもの即ち世界であると感じるのである。それ故我々は、観念論的哲学とは反対に、我々の生が生きる人間とその中に生きなければならない世界(周囲若しくは環境)とに實在として同等の価値を賦与するのを目撃するのである。その中に、他のあらゆる實在とは区別して、「社会」と呼ぶことの出来る、一つの実在を捜さなければならない。ここでいう人間が生まれたときから身を置いている世界を構成しているあらゆるものは、それ独自の存在条件をもっていないこと、即ちそれ自体何物でもないということに注意を要する。物の世界では、我々はどの様な役割も持っていないといえる。寧ろそれらは、我々の目的の為に或いは目的に反する何ものかにすぎないのである。それに反して、生きていく上で自己が出会うところの手段や障害、利便や不便といった要件や必要事の世界では、あらゆるものが我々との関連の下にあり、全てが我々に介入している。それ故、物は根本的に実用物(prágmata)

であり、物と私の関係は実用的(*pragmática*)とってよかろう。世界つまり環境の中には、我々と関係のないものは一つもない、換言すれば各自は環境乃至世界を形づくる全てのものとの係わりを持たねばならないのである。

以上が、オルテガが解する世界とは何かについての根本的真実である。それは、世界の一貫性として我々の生が原初的に成立するものを表現する。そうした世界に関して諸科学が教える事柄は、全て二義的で疑わしい真理であるといつてよい。それは、我々が既にこの世に生き始めてから、我々にとって世界が既にいま在るがままの世界になってから、科学し始めるという簡単な理由によるものである。残念ながら、哲学者達はこのような我々の生という根本的現象をみてこなかったとみなし得る。

### 3. 「我々の」世界の構造 (*Estructura de <<nuestro>>mundo*)

この項目は、「社会的なるもの」と呼ばれる現象の発見或いはその様式とは何かについての把握を課題としている。彼の眼に映る(近年)全ての人達は、社会的理由によって死に瀕しており、その原因が社会的観念に関して被っている混乱にあると推断してのことである。

扱て、手始めとして、これまで吟味してきた内容を箇条書的に纏め乍ら再確認を図っている。即ち、1. 人間的生は、各人の個人的な生である。2. 他のあらゆる実在が発生し存在する根本的実在は、ある一定の環境を考慮に入れ(*en vista de las circunstancias*)、環境内存在(*ser en la circunstancia*)として生きる必要がある人間的生である。3. その中に人間が織り込まれている環境、言い換えれば必要事、要件或いはプラグマタの体系(*un Sistema de importancias, asuntos o pragmata*)から成り立っている世界は、様々な存在の可能性を我々に与えてくれる<sup>(1)</sup>。4. 生は譲り渡せないもの、従って私の生は、私自身に対する絶え間ない責任である。生的世界の構成要素は、私の生の内部にあるものだけである。それ故、私を取り囲んでいるもの全てと私とを直接的な関係に置く私の人間的生は、本質的に孤独であるということになる。斯くして、そうした属性四点を所有していない生は、結果的に、原初的な意味での人間的生つまり



根本的実在としての生ではなく、寧ろ、二義的で派生的な実在であり、疑わしい実在であると解し得ることになる。

ところで、以上の作業の流れで、今度は、我々が物と共にある周囲世界乃至環境の構造についての分析へ歩を進めている。それは、世界が我々から独立した物より構成されている実在ではないという見解を念頭に置いてのことである。この場合、先ず、第一に留意すべき点は、あらゆる物体は二面（裏・表）持っており、我々は、見るという行為によって、第二の面を見ているとき、第一の面を思い出し且つ今見ている面に重ね合わせるということである。つまり、我々が見て理解しているものは、現前しているものではない。物についての以前の経験が蓄積されているところの単なる思い出に呼応する（*corresponde al recuerdo*）明白さしか持っていないのである。ここでの残りのものを共一現前されたもの（*compresentado*）或いは共一現前者と呼ぶことにする<sup>(2)</sup>。第二に留意すべき点は、現前するものは<sup>(3)</sup>我々にとって現時性においてある物であり、共一現前するものは慣習性の中にあるということである。しかもこのことは、我々の周囲、環境もしくは世界の構造に関する第一の法則へ、即ち、この世界が毎瞬間、現前する僅かな物と潜在している極めて多くの物とによって構成されているという我々の世界の第一構造法則（*primera ley estructural de nuestros mundo*）へと導いてくれる。また、それに対して、第二の法則が存在する。即ち物は単独に我々に現前しているのではなく、我々が注意を払わない他の物の上に抜きん出ているというものである。つまり、これらの法則は、我々の世界の構造を定義するもの、言い換えれば世界の解剖学的構造（*anatomía*）を厳密に叙述するものである。特にこの第二の法則は、我々がその中で生きる世界が常に二つの要素と器官（*dos términos y órganos*）を持っていることを語りかける。即ち、それは、我々が注意を払って物を見る第一層と、それらが浮き出して見えるところの背景つまりその中に物が現れてくる範囲という性格を持って働く第二の層とである。我々は、こうした背景、言い換えれば第二の層乃至範囲、を地平線（*horizonte*）とよぶ。更にまた注意すべきは、地平線のその向こうに、現前していない世界の他の部分、隠れている層があることである。斯く

して我々は、世界の中に三層、即ち第一面＝我々の注意を引きつける物、第二面＝そこから物が現れて来るところの視界の地平線、第三面＝現在は隠れているその向こう、を持つことになる<sup>(4)</sup>。

#### 4. 「他者」の出現 (La aparición del <<otro>>)

本稿は、前項目で我々に提示し且つその理解を強く望んだ内容の短い素述で始まっている。それは、生命的世界に現前する物つまり我々が関わりを持たねばならない要件や必要事を構成する筈の物が知覚できる(色・形・音・臭い等)現前であり共－現前(compresencias)であること、しかもそれが兆候(indicación)の形で我々の上に働きかけるということである。そしてこの場合、物と我々の接触の決定的な形が、事実触覚であることは明白で、それ故、触覚と接触(el facto y contacto)とは我々の世界を構築するに当たって、最も決定的な要因であるという点に注意を要する。特に、オルテガに従えば、触覚には常に二つの物が現れる。それは、我々が触れる物体と、その物体が触れる我々の身体とである。我々は接触を通して物を我々の身体内部に感じる。これは、外に現れた周囲世界が、現前によって、つまり物体という物によって構成されていることを意味する。つまり彼オルテガにあっては、人間は、一つの物体内の存在者であり、身体にすぎないのである。そして、この簡単な事実が、我々の世界、我々の生、の具体的構造を決定せんとするのである。言い換えれば、人間は、生涯自己の身体の中に監禁されているといってよい。このことは、私をして、場所づけられた空間的人間(un personaje espacial)とする。しかもそれは、自動的に、人間的世界の第三の構造的法則、即ち世界はパースペクティヴなりと教える。つまり、私或いは他者の場所が何処であろうとも、世界の中の物は、私乃至他者から距離的に生涯離れることはない。逆に言えば、世界にある全ての物は、直接乃至間接的に私や他者との関連のうちに位置づけられ、空間上の地域に見いだされ或いは属している<sup>(1)</sup>。しかも、他者乃至私は相互に浸透不可能なものであり且つ世界が現れてくる時のパースペクティヴも常に異なっており、互いに根本的に孤独な者なのである。

扨て、オルテガに従えば、人間から独立した物の存在は単なる仮説にすぎない。物の存在は、それ自体で目的や根拠を持たず、唯「...の為」の存在に他ならない。これは、物が有する第一義的条件が我々の生に役立つ道具や障害物であることを意味する。つまり、物の存在は、実体性ではなく、我々への奉仕性乃至隷属性であるといえる。ある物が肯定乃至否定的に他の物に奉仕し、それが更に第三の物に奉仕するという具合に連携して、終には人間の目的に到達する奉仕性の構築物を形成している。斯くして、我々各自の世界は、混沌たる状況（*totum revolutum*）ではなく、空間上の地域に位置づけられ、種々の側面を持つ「実用的地域場（*campos pragmatico*）」で構成されている世界である。これこそが、オルテガの提示する世界についての最後の構造的法則である。

ところで、世界に外在する（*ex-istir*）ものに対する自分の態度を基点に、社会なるものを分類する場合には、相違は歴然である。鉱物や植物に対する我々の態度は、一方的である。動物に対しては、限られたレパートリーにおいてはあがあるが、存在を織り合わせるという態度の変化が見られる。つまり、往復運動という新しいタイプの現実が現れる。動物と私の関係には、相互性乃至相関性（*mutualidad o reciprocidad*）と呼ぶべき社会的交わりがあるのである<sup>(2)</sup>。他の人達との関係に着目すれば、前三者即ち鉱物、植物、動物の場合と異なり、彼らは私に対する意見を持っており、そうした点で不安、警戒、危険を感じる。彼ら即ち私の感覚に捉えられる現前は、私の見ている前で物を操作する身体であり、アメリカの心理学者達が呼ぶ“*behavior*”を眼で見える形で振る舞う身体である。ところが、その中に非-外的なもの（*no-externas*）即ちその人の思考、感情、欲求といった各自の純粋な内面性を見いだすのである。全ての共存は、二つの内面性の共存であり、それらが互いに自己を現前させる程、共存が生じるのである。

## 5. 対個人的生。我々－汝－我（*La vida inter-individual. Nosotros-tú-yo*）

この項目は、根本的実在としての私の生に関する視座のもと、共-現在を伴った他人について論考している。その他人の出現は、根本的実在でも、一義的な

ものでもなく、二義的、推測的なものである。しかしながら、この事實は、私の生たる根本的實在には推定された膨大な数にのぼる實在が属することを気づかせてくれる<sup>(1)</sup>。従って、私は、根本的實在における生と同時に、私の社会環境や人類の伝統が作り上げ蓄積してきた第二、第三の實在を、分析も内省もせずには真実らしきものとみなして生きるのである。結果的に、我々の通常の生は、社会の解釈にかまけて、疑似一行為(pseudo-hacer)となり、故に我々は、真正な生を生きてはいない。この状況から脱出する為には、根本的孤独の中で自己責任にもとづく生の業務の収支決算、自己への引きこもり(anábasis)乃至晒け出しによる自分自身の収支決算、を定期的に行わなければならない。この場合の晒け出しとは、哲学に他ならない。それは、自分自身の生を含めた因習的生の批判であって、自己の生が幻想的でないように、根本實在という試金石に照らし合わせて、各々のものをそれ相当の實在の段階に所属させる複式簿記であると見て取れよう<sup>(2)</sup>。

扱て、吟味してきた真正な人間的生の事實を前にして、真実社会的なるものとは何かについての探究に乗り出している。因習的生の視点から我々の一義的現実に絶えず戻りながらである。そして結果的に、ここでの最も重要な対象物は、現前する身体と身振りを備えた他の人間であった。ところが、この他の人間的生の性格は、単なる推測された實在としてしか、我々には明らかにされてこなかった。私と他者が採る行動の相互性(応答)即ち互いに同等に「考慮し合う(contar con)」関係は<sup>(3)</sup>、社会的なるものとして評価することの出来る第一の事實である。しかしその関係は、他者(たる人間)に対する場合のみ私に起こることで、鉱物、植物、動物に対しては見いだせない範疇である。つまり、私の自我と同じ自我を他者も持っていることを意味する。視点を変えていえば、他者が存在するということは、偶然を意味するのではなく、寧ろ原初的属性である。人間は孤独の中には現れない。即ち、人間は他者として、ある者と交わりながら応答者として、社会性の中に現れるのである<sup>(4)</sup>。

ところで、我々が、この世界にある物について分析する上で、我々が犯すかもしれないパースペクティブの誤りを匡す必要がある。つまり、石、草木、動

物と私との関係についての分析を踏んで、人間が他者として現れたという事実  
に直面したが、その分析の時間的序列こそは世界のものが我々の前に現れてく  
る実在の序列そのものであるかのような錯覚に陥る誤りの是正である。実在の  
序列は、逆で、人間的世界が前三者（動・植・鉱）の世界に先行するのである。  
そしてこの事実が、社会的公理（teorema social）の定式化を許す。即ち人間  
は、自己自身のことに気づく以前に、他者の存在という根源的体験を既に持つ  
ており、その意味で他者に開かれたもの、言い換えれば、利他主義者（altruista）  
に他ならないということである。ここで、他者に開かれているとは、他者を考  
慮に入れる用意が常にできているという人間の恒久的且つ本質的狀態、開放さ  
れた状況である。しかしそれは、社会的関係とはいえず、それへの母体たる単  
なる共存乃至現前を示すにすぎない。その点で他者は、私にとって抽象的実在  
であるといってよい。斯くして、このような関係から、第一に私が次第に多く  
の他者を知るようになること、第二に他者に対する私の関係或いはその逆の関  
係が行動的になること、といった二つの系列が生じる。しかもこの系列に沿っ  
て、全ての人に共通する推定的世界のイメージが我々の中に形成される。これ  
は一義的生における各自の世界に対して共通した客観世界と呼ばれる。しかし  
ながら、このことは大きな逆説を示している。即ち、私と他人との共存を可能  
にするのは、客観的世界ではなく、反対に共通の客観的世界の出現を可能にす  
るのは、私と他人の社会性或いは社会的関係であるということである<sup>(5)</sup>。こ  
こでは、人々は、唯世界のいくつかの粗雑な構成要素についてのヴィジョンにお  
いて一致するだけなのであり、合理性をあまりにもユートピア化するカントの  
観念論的推論のような視点を採らないことが肝要である<sup>(6)</sup>。

扱て、共存が可能となる為には、根源的利他主義から抜け出る必要がある。  
その為には、私が開放性を土台にして他者に働きかけ、逆に他者が私に応答す  
る如く、相互性の中に生きることを目指す必要がある。この場合、互いに我々  
である意味で、我々主義（nostrismo）と呼ぶことができよう。ここでは、我々  
が不特定の人間にすぎない他者を相手にした交際が深まると、他者は私にとっ  
て汝即ち唯一の個人となる。しかも今度は、この汝への対応を通じて我を発見

する。斯くして、第一人称としての我が最後に現れてくるのである。

## 6. 再び他者達と我について。彼女への短い旅 (Más sobre los otros y yo. Breve excursión hacia ella)

第6項目では、我々の現実的周囲世界と地平線 (horizonte) と呼ぶ境界線に囲まれた外辺 (una a periferia delimitada por una línea) とを基点として論述を開始している。この地平線という語彙は、物的な世界と思考の世界とに適用される。それは、我々の視界に新しい事物乃至他の人間が現れるに応じて移動する。また、その地平線内に現前する彼の身体は、我々に彼の内部 (intus) 或いは内密を示す豊穠な表現の場である。とりわけ、身振り (gesticulación)、留保 (detención)、言葉や諸種のまなざし (miradas) 等が他の人の内面を我々に示す。これを整理すれば、他の人間が現前するのは、人間の生が私に対して共一現前するというに他ならない。但し、注意を要するのは、私が内面性と名づけるものは、ただ私自身の生の場合だけ私に固有のもの、眼に見えて現前するものであるという点である<sup>(1)</sup>。それ故、純粋な非我は、私の自我の外にある彼の自我 (ego) と、私の世界とは何ら共通性を持たない世界とを持った他の人間 (他我) なのだ。厳密に言えば、この他者の世界は、私が独自の本源的世界の中に見いだす推定であり、到達も浸透もできない世界である。斯くの如くして、当然ここでは、フッサールの如く、他の人間が私に現れたのは、彼の身体が隠されてある一つの内面を共-現前という形で示すからであると解す<sup>(2)</sup> 立場をとるものではないことに注意を要する。

ところで、私の身体と他者の身体との違いが、パースペクティブの相違に起因するという誤った解釈がある。即ち、異なった場所からの認識に起因するというものである。しかし、私の身体が私のものというのは、私が他の事物との関わりを持つ為に役立つ直接的な道具、総括的器官 (órganon) であるからである。私にとって私の身体は有機的な物体である。フッサールはこのことを承知しながら、私の身体と他者の身体との観念を同一視しているのは驚きである<sup>(3)</sup>。というのは、他者の身体がそう在るのは、私の身体を通してだけだからである。

つまり、他人の身体については、その外形しか気づかないのに対して、私の身体は内部から感じられるものなのだ。私の身体が外部から私に現前するものと、他人の身体が私に現前するものとは、違ったものとなるであろう。従って、他の人間の出現について、想像上で、その他者がいる場所へ私の身体を置き換えるということで説明することは難しい。例えば、男性にとって、女性の出現の場合は然りで<sup>(4)</sup>、我々の内面的自我を他者の身体への投影として説明することは矛盾である。現実を考える際に現実を顧慮せず仮説を創り上げてしまう合理主義のように、一つの対象から、その構成要素の一つを取り出して実在性を除去してしまう欠陥を露呈すると推定され得るのである。

## 7. 他者という危険並びに我という驚き (El peligro que es el otro y la sorpresa que es el yo)

この項目は、前項内容全体を基盤としながら、他人が持つ一義的属性についての吟味作業を開始している。その属性とは、他の人間に対する私の行動への応答である。そして、このことは、相手方にとっても、私の行動を勘案した他者の反応を考慮することを強いるのである。即ち、二人の行為の主体者（私と他者）が介入している相互作用を考慮しているとき、言葉の本来的な意味で社会的なのである。他者は、最初から応答者であり、社会的なのだ。但し、ここでは、私に応答できる他者の能力が持つ側面に注意を要する。それは、私の生と同様、他者も人間的生であることを前提とする。従って彼の生は、彼だけの自我と世界とを持った生であり、結果的に、私に応答し共存できる存在者は、その根本実在において私との直接交流は不可能といえる。斯くして、客観的世界は、非我 (no-yo) 的なものであり、共存を通して作り上げて行く憶測 (una conjetura) にすぎず、社会を形成する限りのあらゆる人達のものとしてとれる。それ故人間は、この世界に共存しながら、存在とは何か (τι το ον) という謎に苛まれる宿命にあるといってよい。そこで、我々は感覚を鋭敏にし、それを大胆に判読する任務に戻って行く必要があるのである。

扨て、私は、人間の世界が私の世界のパースペクティブにおいて第一の局面

を占めているが故に、世界の残りの部分、そして私の生並びに私自身を、他者達を通して見る。但し私は、私の生という根本実在の上に、他者の行為や言葉を全て投影する(*proyecto*)ことによって作られた瘡蓋(*una costra*)で私の眼が覆われた世界を生きることになる。そして、そうした生活に慣れてしまい、それへの恭順が破局状況に追い込まれたときだけ、私と他者が共存している疑似一実在(*la pseudo-realidad*)つまり因習性(*convencionalidad*)から一瞬身を引き、根本的実在としての私の生の真正性に引き返すのである<sup>(1)</sup>。つまり、私と他者とは独自の視点とパースペクティヴとを持った二重の生を生きているわけである。

ところで、私と他者との社会関係を整理すれば、「我々(自我)＝他者に開かれたもの＝基礎的利他主義(*un altruismo básico*)＝非社会的関係」→「他者への働きかけと他者からの応答喚起＝共一存の継続＝私にとって不特定の他者から唯一無二の個人へ＝社会関係の生成」といった等置経緯で、我々という生の共存の境界内部で他者は汝となり、親密度・個性・統一性の大小によるパースペクティヴつまり人間性の遠近によるパースペクティヴとしての世界が開かれる。

扱て、人間は、そうした周囲世界の中で、親密さの程度に応じて、好意的な存在乃至敵対する存在といった矛盾した屈折的二面性で成る可能性を自己内部に抱えるものこそ正に社会なのだ。また、その世界の中で、頻繁な交わりを続けて行くに従って、可能性並びに不可能性の体系が具体化されてくるとき、汝がその輪郭を顕わにしてくる。それは、他の人間が一人の汝になる過程の生(内部世界)に立ち会うことに他ならない。ここで私は、隣人の生活体験の流動(生の時間)を見るが、それと同じ割合の時間が私の生にも流れる同時代人(共存する汝達)であることに気づく。並びに我々の周囲世界というこの地平線内部の遙か向こうに、我々と時代を異にした生のタイプをも想定するに至る。

ところで、繰り返すが、他者は形式的にも本質的にも危険<sup>(2)</sup>であり、それは、汝に変化した後も決して消え去ることはない。このような根源的危険性の意識は、歴史全体を通して流れている。しかし、この意識の喪失が18世紀最初の



三分の二世紀と 1830 年から 1914 年に亘って由々しい形で起こってきた。同様の感覚麻痺こそ、ここ 35 年（オルテガにとってである）の間に我々が被ってきた破局の最大の原因である。他者の凶暴性は、不測事態などではなく、私とは折り合わない汝自身の特有な存在様式を有しているのだ。とはいえ、彼との衝突は私自身と汝自身との境界線を発見させてくれる。汝の見解や確信は私の為存在するものではないといえる。ここで留意すべきは、具体的且唯一無二の私（自我）は、既に一定の順序を持つ一連の経験を通じて、徐々に我々の前に現れてくるということである。視点を変えていえば、自分が私であることを詮索するのは、我々と汝との衝突たる社会的関係を通じて汝を知った後であり、そのおかげだということである。繰り返すが、具体的自我は、汝達の後に、そして彼らの中にもう一人の汝として生まれるのだ。つまり自我は、根本的實在並びに根本的孤独としての生の中ではなく、汝との共存という第二の實在の局面に生まれるのである<sup>(3)</sup>。

## 8. 突然人々が現れる（De pronto aparece la gente）

本項目は、自問自答という手法を採り、原初的世界、植物界、動物界、対個人的人間界といったカテゴリーを持って諸環境の内容を尽したと言い得ないと吐露しながら、路上で指揮する交通巡査の行動、服を着る人間の行為或いは我々が日常頼って生きている見解や意見は、どのカテゴリーに属するのかといった問題を検討している。先ず、交通巡査の指揮命令ついていえば、それは人間的行動ではあるが、自己の内部から自己責任の下に採る行動とは異なる。法的に禁じる或いは命令する行為主体は、警察個人でも、市長や国家元首でもなく、結局のところ、社会乃至集団としての国家に他ならない。次に、人間が服を着る行為については、それは自分の思いつきからではなく、正に習慣に従ったものといっていよい。つまり、服を着る行為は、一般的に行われているからである。そうした慣習に従う行為者は、全ての人であって、特定の者ではない。斯くの如く、我々の生の大部分は、自分の好みや思いつきからするのではなく、人々が我々に強制するという事実を我々に気づかせてくれる。最後に、我々が日常頼って

生きている見解や意見の大部分に着目すれば、それは、その真実性や責任ある明確な意識をもった自分の考えを根拠にしているわけではない。つまり我々は、補足不可能で不特定の責任を持たない主体として、言い換えれば、人々、社会、集団の考えとして話すのである。私の生は、そう言われていることや考えられていることを繰り返せば繰り返す程に私のものでなくなり、社会の名の下に行動することになる。つまり、私は社会のロボットとなり社会化されてしまうのである。

ところで、18世紀の後半以来、社会的意識もしくは精神、集団的魂<sup>(1)</sup>があるとされた。しかし、それは手前勝手な神秘思想である。もし、魂という言葉によって、自分の行為に責任を持つ主体或いは自分にとって明確な意味を持っているが故に行為に及ぶ者という意味に捉えたとしたら、そうした集団的魂などはないといわねばならない。もしそうであれば、魂のないものが、人々、社会、そして集団の特徴と解し得よう。これまで、集団的魂、国民精神或いは社会的意識に対して、真の神（デュルケーム）或いは国民の自由を実現する為の無限に優れたもの（ヘーゲル）といった崇高な性質が帰せられ<sup>(2)</sup>、人間より遙かに人間的なものとして現れてきた。しかしそれは、集団は確かに人間的な何かではあるが、魂のない、非人間化されたものということの意味する。即ちここにあるものは、人間が有する本源的な性格を欠いた人間的行動、つまりそれらを創造し且つ責任を有する主体を持たない行動である。従ってそれは、人間的な何かではあるが、機械化され、物資化された奇妙な何かである。とすれば、当然、今まで何時も非公式に社会的世界と呼ばれてきたものは、結局の所、公式的な意味を持つに至るのであろうかという疑問が浮上してこよう。

## 9. 挨拶に関する考察（Meditación del saludo）

第9項目は、挨拶事例を採り上げて、更に深く慣習について分析している。但しそれは、これまで展開してきた内容の確認の為にこの項目の約半分以上を当ててのことであるが、紙幅の問題もあり、その内容については極手短に触れるに留めたい。即ち、それは、1. 社会的なものに関する正確な概念の欠如と社

会学者に対する不信の念とを基点にした社会的なるものへの探究, 2. 社会的なるものは対一個人的なものとは対蹠的なもの (contraste con lo interindividual) として現れること<sup>(1)</sup>, 3. 交通整理をする警察官の指揮・命令や人間が服を着る行為或いは日常頼って生きている見解や意見は自発性や責任を持たない非人間的行為である, といった内容である。

扨て、挨拶についてであるが、その行為は、対一個人的乃至対人間関係ではない。我々の挨拶の創造的且つ責任ある主体は、他者でも私でもなく、この両者を包む誰かである。つまり、挨拶は、私や他の特定の個人に起源を持たず、慣わしから引き出されたものである。それは、我々の自発的意思とは関係のない反復行為といってよい。結果的にみて、挨拶は、それを行う主体の中に知的な意味で起源を持つこと、並びに、その主体の意志の内に産み出されたものであるという性格を欠いた行動を意味する。従ってそれは、機械的且つ非人間的な運動に似たものであり、しかも挨拶の時に採る姿勢について理解すらしていないといことである。特に挨拶を強いる如き慣習<sup>(2)</sup>は、我々の見いだす最初の、そして最も強力な実在である。即ち慣習は、我々の社会的環境もしくは世界であり、我々がその中に生きるところの社会なのだ。我々はこうした慣習を通して、人間及び事物の世界を見るのである。

#### 10. 挨拶に関する考察。語源学的動物たる人間。慣習とは何か? (Meditación del saludo. El hombre, animal etimológico. ¿Qué es un uso?)

この項目は、挨拶という一連の流れに沿った慣習 (uso) に関する論考である。我々の周囲世界には慣習という実在がある。その慣習は、我々に対して、出生以来、あらゆる側面から侵入して圧迫する。またそれは、頻繁に遂行されることによって個人の中で自動化され、機械的に機能する行為である<sup>(1)</sup>。とはいえ、実際、人間の呼吸や頻繁に両足を動かす歩行は慣習とはいわないし、反対にローマ人の世俗的な遊戯 (ludi saeculares) 即ち世紀が完了したときの宗教的遊戯の如く、国によっては、各世紀毎に挙行する祝典といった頻度の低い社会的な慣習がある。斯くして、慣習という実在の中に頻度という簡単な沈殿物を見る

ことは、分析的精神の名に値しないといってよい。

ところで、慣習は(言語や身振りを伴う挨拶<sup>(2)</sup>然り)、偶発的暴力、強制或いは制裁という脅威を見せつけながら現れる。つまりここに、社会的事実の別の属性たる物理的暴力の脅威がある。これは何か特定の主体から出てくるものでもなく、社会的力たる慣習という強制を持って機能するのである。いうなれば、これは、我々の生において最初に「社会的なるもの」が自己を現すところの特徴である。しかも、特に、挨拶の言葉に関する音声学や言語学的形式を再構築してみると、語源は、言葉だけに特有のものではなく、あらゆる人間的行為の中に見いだされる<sup>(3)</sup>。何故なら、それら全ての中に慣習が介入して漂いながら生き続け、終には絶対に理解することの出来ない様相を呈するまでになる。言葉が語源を持つのは、それが慣習だからなのだ。このことは、人間は語源的動物であるとの示唆を我々に与え、延いては歴史全体が巨大な語源(慣習)の体系であるという表明を我々に強いることになる。斯くの如くして、世界の歴史は、巨大な語源の様相の下に現れるのであり、語源とは歴史理性と呼ぶものの具象名詞との推定が成り立つに至る。

扱て、挨拶(慣習)の生成と廃止を想定した場合、それは個人の意志の自由にはならないといえる。特に、その廃止に当たっては、全員一致などといった数字の問題ではなく<sup>(4)</sup>、集团的仕来りと呼ぶ現象が問題なのだ。また、設定や消滅には、時間がかかる点にも注目すべきである。抑も社会は、ゆっくり歴史の中を進んで行く慣習で出来上がっている。繰り返すが、歴史は、集団乃至慣習の歴史といってよい。慣習というものは、個性的な人間が古くさく既に意味を失ったものとして感じる生の形式である。それ故、社会的なるものは、人格的人間の生を機械的に保存し、化石にする機械であると見てとれる。常にその運動の中で自己を消耗する人間的生を救い出す為には、それを機械化しなければならず、また非人格化しなければならないのである。

ところで、慣習と社会に関する特徴を更に浮き彫りにする為に、先ず、平和的慣習(*el salido pacific*)と好戦的慣習(*el saludo bélico*)とを比べれば、前者は「設定される場合、或いは過去のものとなる場合に時間がかかる＝物理的制

裁を受けない＝行使する責任を負わされない＝不当な行為者は不利益な判定を受ける」、また後者は「一瞬のうちに人に課せられる＝特別に指定された者による命令・強制的行為＝組織された社会的権力＝法、指令、命令」といった等置が成り立つ。また次に、「強い厳格な慣習 (usos Fuertes y rígidos)」と「弱く曖昧な慣習 (usos débiles y difusos)」を比較すれば、前者は「法乃至国家＝保安官・警察の行為」、後者は「衣服、食事や社会的交わり＝漠然と慣習乃至習慣と呼ばれてきたもの＝言語自体と世論＝個人的観念が決まり文句に変化」との等置を見て取れる。結局のところ、慣習は巨大な建造物を構築しながら互いに繋ぎ合わされ、互いに根拠を持ち合うのである。そしてこの慣習の建造物こそ他ならぬ社会とみなし得るのだ。

#### 11. 人々の言説即ち言語。新たな言語学に向かって (El decir de la gente: la lengua. Hacia una nueva lingüística)

この第11項目は、言葉という慣習を“palabra clave”として展開している。我々が使う言語は我々より先に社会的環境の中に存するものである。しかも、この言葉による表現と実際に口に出して言う表現とを区別する必要がある。というのは、我々は、話す言葉の概念を理解しているが、実際に口に出している表現自体の意味を理解していないのである。例えば、恋人同士であれば、互いの感情が「愛」と呼ばれる理由が解らない。それは、挨拶（慣習）を交わすに当り、握手という行為は理解できるが、何故我々が手を差し出すのかに関して理解できない如くにである。

扱て、ここで提起している慣習の特徴の一つは、実践し遵守しなければならぬと感じる強制力である。慣習を無視する場合、そこから喚起される諸々の報復の種類や段階が想定される。その際、強制がそれぞれの慣習の型によって違った形をとって現れることや、それらの違いによって各々の慣習が社会で如何なる機能を果たしているかが明らかになる。慣習の強制には、物理的強制を伴った強い慣習と伴わない弱い慣習があるといってよい。孰れにせよ、環境は、社会的環境である限り、普遍的な強制力を持つものとして現れる<sup>(1)</sup>ことは既に

みてきた通りである。但し、オルテガの視点では、挨拶よりも言語活動において、社会的実在の特質がより明確に示される。社会とは、根本的には、一つの集団を形成する人達の生活共同体である。一群の人達が今迄の集団から分離するに連れて、個人の意識に関わりなく自動的に言語の発音、意味、構文の形や慣用語句は変化し始め、やがて新語が形成される。しかし、歴史上繰り返されてきたこの現象について、社会学は、研究に値するテーマとは見てこなかった。ところで、言語活動を分析するに当たっては<sup>(2)</sup>、その内心を述べようと望む個としての人間と、既存言語との絶え間ない衝突が問題となる<sup>(3)</sup>。個々の人間は、誕生以来、一つの集団の言葉(慣習)が示す強制に従属しているのだ。自分が生まれ教育された社会は、容赦なく自己についてまわる。表現を変えれば、母国語は人間を永遠に鋳型にはめ、いくつかの可能性と共に一連の根本的限界をも人間に課すのである。とはいえその逆も真で、個人的なことを述べようとする人は、表現する為の適当な言葉の慣習を見いだせず新しい表現を案出する。個人的な言説と人々の言説との戦いは、言語活動の通常存在様式である。社会の囚われ人である個人は、社会から脱出して自分独自の生の形式で生きようと何度か望むが、そうした試みは、挫折に終わることのほうが多い。斯くして、我々は言語活動の中に、社会的事実が何であるかの範例を手にするのである<sup>(4)</sup>。

## 12. 人々との言説、即ち「世論」、社会的「しきたり」。国家権力 (El decir de La gente: las <<opiniones públicas>>, las <<vigencias>>sociales. El poder público)

前項目の流れを踏襲してこの第12項目では、言説と社会環境について吟味している。話すこと(hablar)は「外から内へ浸透してくる＝機械的・非合理的に外部から内部へ受け入れられ且つ同様に外部へ戻される」という等置内容であり、また、言うこと(decir)は「個の内部から始まる＝個人の内心を外へ表明したいという意志＝使用言語は個人の自由に任されている」という等置を特徴とする。この比較対象から、「言うこと＝個人本来の行動」或いは「話すこと＝個人に押しつけられた慣習を実践すること＝機械的・非人間的行為」

という推定が可能である<sup>(1)</sup>。

扨て、我々は、社会的環境で慣用となった言語を用いて様々な觀念を吹き込んでゆく。それは、何ら合理的なものではなく、機械的で了解不可能なもの、押しつけられたものなのだ。我々の社会環境は、そうした言葉や言説で満ちている。そうした我々を取り巻く意見を觀察すれば、二つに分類できる。即ち、自明なこととして万人が認めているもの、言い換えれば効果的に確立された効力を持つ意見たる世論（*opinión pública*）と、一般に認められている意見ではないものとである。前者の場合、我々が話すのはしきたり（*vigencia*）として全ての人の上に押しつけ圧力をかける確立された有力な意見であるが、後者の場合は特殊な意見である。特殊な意見には、説得的で影響力があるものであろうと欲する内的熱意を伴っており、また短い透視縮画（*escorzo*）によってではあるが、それらの意見を述べる理由が示されている。つまり、特殊な意見と世論とでは、両者に根本的な相違があるのである。後者が肯定される為には、それ自体で支配し君臨するのに対して、前者は一人、数人、多数の人間がそれを支持する労をとる限りにおいてしか存在しないのである。

ところで、研究或いは調査機関のアンケートにおいて、世論は殆ど個々人に支持された特殊な意見と混同されている。しかしながら、社会的しきたりという根本的に社会学的な現象は、単に意見ばかりではなく全ての慣習の中に見いだされるものであり、従って社会的事実の総体たる社会の最も本質的性格である。つまりしきたりは、個人的な支持には基づいていないのである。あるものが慣習であるのは、個々人の支持に依拠するからではなく、逆に彼らに課されるものである故にそれは慣習なのだ<sup>(2)</sup>。こうした理由から、全て社会的なるものは個人的なるものとは異なる実在といえる。しかし慣習は、多数決原理に由来するものではなく、ある社会全体という大衆的な空間で形成されるのである。ここでは、しきたりという觀念そのものをよく理解することが肝要である。しきたりの特徴は、第一に、我々の個人的な支持に依拠するどころか、我々の上に強制力を及ぼすものであり、第二に、いつでも助けを求めることの出来る権威、権力として現れるものといった二点に纏めることができる。注意すべきは、

こうした特徴は、伝統的に国家の法並びにその活動に帰せられている特徴と一致するということである。このことは、結果的に、法律の機能は我々の個人的支持に依拠しないこと、或いは拠り所とすることの出来る集団的権威として役立つという二つの属性を法律固有のものと解す法哲学者の誤った見解を明らかにすることになる。それらの属性は慣習の中にも明らかに捉えられ得るものである。つまりそれらは、あらゆる社会的事実を構成する属性であるといえよう。慣習の総体としての社会は、一方で我々を威圧し、また一方で我々の方で社会を頼りに出来る権威として感じている。世論並びに有効な意見は、その背後にそうした権威乃至権力を控えており、そうした集団の力こそ国家権力なのである。つまり、その様な国家権力とは、世論の精力的な放射に他ならず、世論に養われているその他の慣習或いはしきたりもその中に漂っているのである。逆に言えば、それは、その背後に、公的なもの、統一的で強い有効性を備えた意見をひかえているということである。そうでないときには、社会は引き裂かれ、革命並びに内乱となる。厳密に言うなら、社会とは、社会的な諸要素並びに諸行事と、非社会的且つ反社会的諸行為並びに諸要素間との絶え間のない闘争なのだ。

### Ⅲ 『人と人々 (El hombre y la gente)』の内容整理

これまで、12項目で構成された『人と人々 (El hombre y la gente)』を、特に各項目で何が論じられているのかに着目しながら、俯瞰してきたが、その外形や内容を整理し、本作品が意図する理念を浮き彫りにしたいと思う。扨て、この作品の外形的特徴として、先ず第一に、論理展開の作業工程を眺めれば、第一工程として、騒然としたスペイン社会の現状、言い換えれば自己疎外 (la alteración) に陥って動物園の猿の如く常に周囲の事物に支配され続けて盲目状態に苛まれている現状から抜け出る為に、社会的なものについての明確な観念の探究を課題とする旨を表明している。自己自身が真理を求めて自己内に籠もる可能性即ち自己沈潜 (ensimismarse) を人間の最も本質的な属性と



捉えながら、その喪失を憂いてのことである (1.)<sup>(1)</sup>。第二工程として、社会現象と呼ばれるものの発見及びその様式についての吟味という意向を示しながら、適宜、第一作業課題の再確認を遂行している (1. ~ 3.7.9.)。特に、ここでは、「人間の軌跡図 = 自己疎外→自己沈潜→プラクシス (prâxis)」或いは主知主義の逸脱とそれに続く主意主義の逸脱をたどった歴史的経過 (1), 「根本的実在 (reakudad radical) = 他のあらゆる実在が発生し存在する場 = 各自の個人的な生 = 環境内存在 (ser en la circunstancia) として生きる人間的生」(2.3.5.), 「共-現前 (compresencis) = 非-現在 = 兆候の形で我々の上に働きかけるもの = 慣習の中にあるもの」(3.4.), 「生命的世界に現前するもの = 現前でもあり且つ共-現前であるもの」(3.4.) といった術語や語句乃至見解を展開している。しかもその場合、歴史上繰り返される自己喪失と自己再発見の可能性について分析するには、人間の構成要素であるという視座の下に、究極的実在の領域へ引き返して見ることでなければならないと強調してのことである (3.)。第三工程として、「他人の出現 = 非根本的実在 = 二義的・推測的な実在」(5) という立場から或いは「他人の現前 = 私に彼の内部を示す表現の場 = 人間的生が私に対して共-現前する豊穡な表現」(6.) という等置から、更にまた、「他の人間が持つ一義的属性 = 他人に対する私の行動への応答 = 私の行動を勘案した他者の反応 = 行為の主体者 (私と他人) の相互作用」(7.) についての吟味から、深遠な社会的なものに関する探究に取り掛かっている。第四工程として、「路上で指揮する交通巡査の行動 = 自己の内部から自己責任の下にとる行為とは異なる = 社会乃至集団としての国家の指揮命令」(8.9.), 並びに種々の慣習乃至しきたり (vigencia) を "parabla clave" とし、1. 服を着る人間の行為 (8.), 2. 一般に我々が頼って生きている見解たる世論と個人的意見 (8.12.), 3. 日常乃至祭式で取り交わす挨拶 (9.10.), 4. 辞書や文法書に見る言語・話すこと・言うこと、に (10.11.12.) 関して吟味している。しかもその作業から、社会的精神や集団的魂の否定 (8), 人間を語源的動物とみる視座 (10), 語源は歴史理性 (10) という見解 (10) や社会的環境と強制力を属性とする慣習 (11.12.) との関係を明らかにしている。斯くの如く四つの

工程を経て、本稿での主要課題とした社会的なるものの把握を仕上げているものと見て取れる。第二に、ベルクソンやライプニッツの著作に関する V. ジャンケレヴィッチ (Vladimir Jankelevitch) の解釈と同様のことが<sup>(2)</sup>、本作品についても成り立つものと思える。つまり、12 項目の構成内容からして、変節のないオルテガの基本的視点の全体がそっくり新たな「社会的なものの探究」という照明の下に姿を現しているものと推定してもよいと思えるのである。第三に、ヴォルテール (François-Marie Arouet) が諸国民の精神文化の特徴を叙述する際に彼らの使用言語を比較する手法を採った様に、オルテガは自己の論理展開を十全なものにする為に、適宜、ギリシャ語、ラテン語、スペイン語、ドイツ語、フランス語の同音異義語や類字語を提示している (2.3.5.7.12.)<sup>(3)</sup>。第四に、本作品全体を通して、多くの思想家の見解が散見されるが、彼の他の作品の場合と同様に、明確な典拠箇所が不明である。それ故、読解には筆者なりに引用文献の典拠箇所の確認が必要であった点をも特徴として指摘できる。

ところで、粗雑乍ら本作品の外形的特徴を提示し終えたので、次にその内容整理に取り掛かりたいと思う。この作品は、適宜繰り返してきた様に、社会的なものについての正確な概念を持ち合わせずに論争し混乱に陥っている現状からのスペイン人の脱却を起点としている。それは、これまで鳥瞰してきたオルテガ作品に一貫して流れている老衰したスペイン精神文化からのスペイン人の救済という路線<sup>(4)</sup>を踏襲した作品と推定してもよいと思える。特にこの小論では、このテーマへの処方箋を求めて諸文献や社会学者達の見解を吟味したが、満足を得るものではなかったので、彼自らが社会的なものについての観念の探究に乗り出す決意を表明した作品となっている。コントの諸作品やスペンサーの『社会学原理 (The principles of sociology)』或いはベルクソンの主著の一つ『道徳と宗教の二源泉 (Les deux sources de la morale et de la religion)』についての分析結果を吐露してのことである<sup>(5)</sup>。但し、その内容に関する縷述や典拠箇所の提示は見出せないものの、この不満こそはオルテガ社会理念の特徴を暗示するものと察する。

そこで、無謀とは承知しつつも筆者なりに膨大な文献にみる彼らの見解を

敢えて概略的に示せば、先ずコントの場合、彼はフランス革命や産業の近代化による社会の激変を背景にして、安定した社会秩序とその進化をテーマに、社会学的なものの学の追求を、数学、天文学、物理学、化学、生物学が有機的・総合的に縦軸に体系化されているという視点で以て遂行しているものとみてとれる<sup>(6)</sup>。そしてその論考作業工程として、「神学的段階→形而上学的段階→実証的段階」という歴史的・知的進化の三体系を辿り、最終的に実証科学への着地を構想している。そしてそこへ到達した暁には、観察された諸現象間の恒常的法則の確立とそれへの個人的思惟の従属という視点が整備され、延いては社会秩序が安定して保持される新世界が到来すると想定しているのである<sup>(7)</sup>。次に、スペンサー社会学の特徴について一瞥すれば、“Survival of the fittest,” “militant type,” “industrial type” を根幹とする『社会学原理 (The principles of sociology)』だけでも、取り組んだ課題は実に多岐に亘り且つその作品に “A system of synthetic philosophy” というタイトルを附している如く、独立した厳密な一科学として規定できない内容である<sup>(8)</sup>。それは、コントが説く縦系列の進化という考えを批判し、生物学的に諸現象が絡み合って進化し自然淘汰が図られるという視座に立つ有機的進歩の法則を主張する。継続的分化による単純（一般人間の個的形態）から複雑（社会的形態）への進化が至る所で支配しているという視点に立ってのことである<sup>(9)</sup>。変化する環境へ自由に適応して生き残った社会生活を対象とする諸科学を重視する姿勢を堅持しているといっていよい<sup>(10)</sup>。では最後にベルクソンの『道徳と宗教の二源泉 (Les deux sources de la morale et de la religion)』を俯瞰すれば、それは、道徳、静的・動的宗教論、機会学・神秘学（現代機械文明の批評）で構成された社会学的なものの分野を論述した作品とみてとれる。そこでは、秩序 (ordre)、飛躍 (élan)、動的な (adjutores)・静的な (statique)、閉じたもの (le clos)・開いたもの (l’ouvert) という “mots-clés” が駆使され、生物学、医学、神学、道徳、心理学、物理・化学、芸術が入り組んだ人間存在の持続する飛躍が厳格な体系無しに論述されている<sup>(11)</sup>。特に、「一般個の生命的飛躍 (élan vital) = 持続する分岐乃至分化 = 絶えることのない自由な異質への生成」という等

置,「『閉じられた有限な社会 = ある特定集団の社会 = 閉じた道徳・静的宗教の社会』から『無限に開かれた社会 = 人類全般としての集団社会 = 開いた道徳・動的宗教の社会』への突然の飛躍」という見解を基盤にしてのことである<sup>(12)</sup>。斯くして,三者の思索は共通して,1.我々にとって世界が既にいま在るがままになってから開始した諸科学の合成形式で社会的なものの学を捉えている,2.進化乃至飛躍という語彙が社会的なものの学の核心をなしている,3.生物学的・抽象的人間行動の分化と総合に力点が置かれ,個の内的構造に関する吟味が不十分である,という点を特徴として指摘できよう。

扱て,オルテガが目論む社会的な学の追求にとって,既掲1.は諸科学の合成を社会科学と捉える構想,2.は結果的に自己疎外を齎す「ガリレイに始まる伝統思考 = 合理主義 = 進化論的志向 = ユートピア主義」<sup>(13)</sup>の盲目的接受姿勢,3.は社会の構成員としての一般個内構造へのアプローチの欠如という点で,全く忌避すべき代物であったものと推量し得る。無論,オルテガも,三者同様に社会的なるものを吟味するに当たり,人間の軌跡図及び歴史的経過を採りあげていることは事実である。しかし彼は,人間の歴史的過程を進化乃至飛躍として捉え乍ら諸科学が絡み合った社会学の構築乃至把握を模索した三者とは異なる意識次元に立っているといつてよい。というのは,彼は,内省という可能性を人間の最も本質的な属性と看做す基盤に立ちつつ,他のあらゆる実在が発生し存在する根本的実在(realidad radical)たる原初的意味での各自の生に焦点を当て,人間の歴史を通じて周期的に繰り返される環境,即ち「疎外,沈潜,プラクシス」で成る生世界の輪転,という現象に着目しているのである。言い換えれば,彼は,厳密に社会的事象と呼ぶ他ないものについて,飽くまでも環境内存在として且つ自己責任で生きる必要がある原初的人間の生を通して,追及しているのである。ここでの他人の生は,二次的で派生的な単なる景觀(mero espectáculo)に過ぎないものであることに注意を要する。しかも,これを基点にして,第一に,周围世界乃至環境の構造を示す三法則を提示している。即ち,現前と共一現前との共存(第1法則),三層から成る構成(第2法則),カントの観念論<sup>(14)</sup>とは相容れないパースペクティブ的に位置

づけられた人間的生（第3法則）である。第二に、ホッブズやスピノザ<sup>(15)</sup>のように対等な個人間の契約という範疇、「対個人的なもの＝社会的関係」と捉えるウェーバーの視点<sup>(16)</sup>或いは「私の身体＝他者の身体」と解すフッサールの見解とは掛け離れた、基礎的利他主義（un altruism básico）に基づく「我々一汝一我」というベクトルを示す社会関係の生成という見解を表明している。つまり、自分自身についての詮索は、自我を中心としたデカルトの思惟方法とは逆に<sup>(17)</sup>、汝との共存という第二の實在の局面に生まれるという視座を背景にしている。正に、ここでの利他主義こそ、個内構造へのアプローチの糸口であり、環境の中で、他人の応答で開かれた自分の存在が浮かび上がってくる構図が明確に描かれることになるというであろう。第三に、我々の周囲に實在する諸慣習乃至しきたりについての見解を縷述している。即ち、1. 慣習乃至しきたりは、我々の社会的環境或いは世界ではあるものの、各自の責任ある明確な意識を根拠にしているわけではない。それ故、デユルケームやヘーゲルが敬意を払う社会集団の魄などは、オルテガにとっては、非人間化された精神に他ならないと映る<sup>(18)</sup>。2. 慣習は、強制或いは制裁という脅威を伴って機能するが、その場合の強制の強弱によって、各々の慣習が社会で如何なる機能を果たしているかが明らかになる。第四に、人間は語源（慣習）的動物、延いては歴史全体が語源の体系であり、歴史理性と呼ぶものの具象名詞との推定さえ成り立つと論考している。それは、語源が言葉だけに特有のものではなく、慣習という姿であらゆる人間的行為の中に見出されるものとの視座に立ってのことである。しかも、この見解を踏まえ、根本的に社会学的な現象は、全ての慣習の中に見出されるものであり、従って社会的事実の総体たる社会の最も本質的な性格であると捉えるに至っている。それは、個人的なものとは異なる實在である。そして最後に、社会とは、社会的な諸要素並びに諸行事と、非社会的且つ反社会的諸行為並びに諸要素間との絶え間ない闘争なのだと結んでいる。

#### IV エピローグ

本稿では、『人と人々 (El hombre y la gente)』を俯瞰して、彼の社会学の基本理念を筆者なりに確認しようと努めた。本『覚え書き』を作成するに当たっても従来の方針、即ち、フッサールや I. ウォーラーステイン (Immanuel Wallerstein) の研究姿勢に倣い<sup>(4)</sup>、唯只管、原典の重畳な読解だけに努めてきた。無論、これまで『覚え書き』の中で、適宜、繰り返してきたように、優れた数多の邦訳や内外の概説書或いは研究所の存在は承知しているが、それらに呑み込まれることなく、何よりも先ず筆者なりのオルテガ解釈を完遂する為である。但し、この度は、なかなか先が見えずに怖さを感じながらも、膨大なコント、スペンサー、ベルクソンの作品集にも目を通す必要に迫られ、難渋した次第である。

扨て、本稿プロローグでも触れたことではあるが、社会学的なものの把握という本作品の課題においても、スペイン社会に蔓延る精神疾患からスペイン人を救済する為の処方箋の模索という、これまで鳥瞰してきた他のオルテガ作品に一貫して流れている息吹を見いだすことができた。とはいえ、本『覚え書き』作成の目的に支障なしと確信してのことであるが、紙幅の問題もあり、語学力の不足が原因でもあり、原文に見られる諸言語に関する比較論究箇所を充分にとりあげていないという欠陥を秘めた研究ノートになってしまったことを反省している。今後は、こうした問題を反省しながら、次のオルテガ研究に取り掛かりたいと思う次第である。

#### 注

資料として、Colección 版(8):Ortega y Gasset, El Hombre y la gente, Revista de Occidente en Alianza Editorial, 2003. Taurus 版:José Ortega y Gasset, Obras Completas, Tom X, Santillana Ediciones Generales, S. L. y Fundación José Ortega y Gasset, Juan Pablo Fusi Aizpurúa, Taurus, 2005. Norton 版:Man and People, translation by Willard R. Trask, Norton & Company, 1963. 白水社版:『オルテガ著作集』5, 白水社, 1977

年.を用いた。但し、主要文献とした Colección 版 (8) のページ数だけを掲げることとする。尚、文献の最後につけた (NW) は IL. Northwestern University Library (USA) 所収を意味する。E. Fusserl の文献は *Gesammelte Schriften*, 4. 5. 8. Hambg, 1992. を、また E. Kant の文献は *Suhrkamp taschenbuch Wissenschaft*, 1974 を使用する。

## I プロローグ

- (1) 抽稿『オルテガ研究の覚え書き』(6), 国士舘大学政経学部附属政治研究所, 『政治研究』, 平成 27 年 (以後『覚え書き』と略記する)。
- (2) ヨーロッパ人が「文化の没落 (*fracaso de la cultura*) 」と呼ぶ如き情勢である。Colección 16. *El tema de nuestro tiempo*, p.106-111 (以後, *nuestro tiempo* と略記する)。『覚え書き』(4), 150 ページ。
- (3) 『覚え書き』(6) 121 ページ。
- (4) 正にここに, "yo soy yo y mi circunstancia, y si no la salvo a ella no me salvo yo." 或いは "El hombre rinde el maximum de su capacidad cuando adquiere la la plena conciencia de sus circunstancias. Por ella comunica con el universe" という命題が浮かび上がってくるといってより。『覚え書き』(1) 172,175. (2) 217-218. (3) 179-180,187-188,190,192. (4) 156-159,168. (5) 174. (6) 140 ページ。Colección17. pp.21, 24-26, 105-107. Colección16. *Nuestro tiempo*, pp.137-143.
- (5) Tauris I. *Artículos*1902, pp.5-9.
- (6) Pierre vilar, *La guerre d'Espane, Que sais-je* (2338)1986, pp.15-21. 関哲行, 立石博高, 中塚次郎『スペイン史 2』山川出版社, 315-316 ページ。
- (7) Colección 13. *España invertebrada*, pp.44-51, 58-61, 74-79. Colección 2. *La rebellion de las masas*, pp.88-89,143-197.
- (8) Colección 8. の編纂者 P. ガラゴリ (Paulino Garagorrii) の序文 (Nota preliminar) によれば, 12 項目ではなく, 更に 8 項目, つまり 20 項目が予定されていたが, 再現されていない (p.10)。Norton 版の出版者序文では, 具体的な数で各地域での講演を示している (p.7)。白水社版では具体的に 20 の項目名を提示している (333-334 ページ)。
- (9) J. Marias, *obras completas V*, p.491.
- (10) Colección 8, p.10.
- (11) Colección 15. *Historia como Sistema*, p.44. 尚, このことは, Colección 8. の編纂者 P. ガ

ラゴリ Paulino Garagorri) の序文にも見出される (p.10)。

## Ⅱ 『人と人々 (El hombre y la gente)』の内容鳥瞰

### 1. 自己沈潜と自己疎外 (Ensimismamiento y alteración)

- (1) 即ち, "la lay, Estado, la nación, la opinión pública, la pacifismo, el capitalismo, el liberalismo, el autoritarismo, el colectivismo, publica," 等である。
- (2) ここでは, 典拠の詳細な提示はないが, コント, スペンサー, ベルクソンを掲げている。本稿Ⅲで再度触れることにするが一応, 関連文献を掲げておく。Augusto Comte, *Œuvres D'Auguste Comte*, Paris, 1970 (以後 Comte と略記する)。The Works of Herbert Spencer, VII. The principles of sociology, Osnabrück, 1966 (以後 Spencer と略記する)。Henri Bergson, *Les deux sources de la morale et de la religion*, France, 1932 (NW 以後 Bergson と略記する)。本稿Ⅲ注 (6)-(12)。
- (3) 白水社版や Norton 版を参照して "alteración" に自己疎外, "ensimismarse" に自己沈潜という日本語を当てた。
- (4) それぞれ, "La alteración=el hombre se siente perdido, náufrago en las cosas. Ensimismarse=el hombre, con un enérgico esfuerzo, se retira a su intimidad para formarse ideas sobre las cosas y su posible dominación. Praxis= el hombre vuelve a sumergirse en el mundo para actuar en el conforme a un plan preconcebidos." ということである (p.30)。
- (5) ここでオルテガは, "Pero lo mas grave en esa aberracion intelectualista,... sino que consiste en presentar al hombre la cultura, el ensimismamiento, el pensamiento, como una gracia o joya que éste debe añadir a su vida, por tanto, como algo que se halla por lo pronto fuera de ella, como si existiese un vivir sin cultura y sin pensar, como si fuese posible vivir sin ensimismarse," (pp.38-39) と述べている。
- (6) 思考能力は, 人間が有する天与の資質ではなく, 不安定な創造物であるといえる。この説明の為に, G. W. F. Hegel (*Vorlesungen über die Philosophie der Geschichte*, Reclam, 1961. S. 39-57.) や F. Nietzsche (*Also Sprach Zarathustra*, Leipzig, la Vergen, TN USA, 2010. S.21-23.) の見解を提示している。文献やページ数は筆者挿入。
- (7) *España invertebrada* (Colecion 13, p.27f) で提示した見解である。

### 2. 個人的生 (La vida personal)

- (1) ここには, 隣人の歯痛の場合を例示し, "El dolor de muelas del prójimo es últimamente una suposición, hipótesis o presunción mía, es un presunto dolor. El mío, en cambio, es incuestionable." と述べている (p.46)。



- (2) 人間と異なり, "la piedra, la planta, el animal es dado su ser ya prefijado y resuelto." といえる (p.50)。
- (3) ここでは, 「人間的生=根本的実在」を解す上で, 人称代名詞や所有代名詞 (pronombre personal y pronombre posesivo) で表現できる「私」という範疇とは次元をことにすることに注意を要する。即ち, "Lo que ha llamado así no es solamente yo, en el hombre sino la vida, su vida" といえるのである (pp.53-54)。なお, この見解の為に, 諸種の語彙を提示しているが, 意識的に詳述を省く。

### 3. 「我々の」世界の構造 (Esturctura de <<nuestro>>mundo)

- (1) この点について, "Esto nos obliga a ejercer, queramos o no, nuestra libertad." や "Tenemos que elegir en cada instante si en el instante inmediato o en otro futuro vamos a ser el que hace esto o el que hace lo otro." 更には "Somos a la fuerza libres." といってよい。
- (2) ここで "...idea debida al gran E.Fusserl." と述べているが (p70), 典拠不明故, 筆者なりに示しておく。E. Fusserl, Cartesianische Meditationen, §5.S.13-16. Ideen zu einer reinen Phänomenologie, §88.94.104., S.202-205.216-220.240-242. Logische Untersuchungen, Kap.5, §438.S.650-651., Kap.6, §41.S.661-663.
- (3) 正確に言えば, "Lo que propiamente nos es presente no son las cosas sino colores y las figuras que los colores forman." "...Que todo eso está ahí porque tenemos órganos de los sentidos y ..." "...en sernos señales para la conducta de nuestra vida,..." ということを意味する (pp.74-75)。
- (4) ここでの説明を補うために, 諸種の語彙を提示しているが, 詳述を省く。

### 4. 「他者」の出現 (La aparición del <<otro>>)

- (1) 例えば, "las imágenes de Homero no son corporales y no existirían, no serían para nosotros, si no hubieran sido escritas en unos pergaminos." といえる (p.83)。
- (2) 特に, "Desde luego nos retenía para contestar afirmativamente la limitación de la co-existencia y además un carácter confuso, borroso, ambiguo que percibimos en el modo de ser de la bestia por lista que ésta sea." という見解に立っている (p.95)。

### 5. 対個人的生。我々ー汝ー我 (La vida inter-individual. Nosotros-tú-yo)

- (1) ニュートンの世界→アインシュタインの世界→デ・ブロイ (P. L. V. de Broglie,) といった物理学界の図式が示す如く, 理論には完成がなく揺れ動くものである。この点については拙稿『覚え書き』(6)を参照せよ。

- (2) ここに諸種の語彙を比較提示しながら補足説明している。詳述を省く。
- (3) 「応答できる」という視点を説明する手段に諸種の語彙を掲げている。詳述を省く。
- (4) この視点は、Fusserl, *Cartesianische Meditationen*, §53.58.S.119-120.135-136. が参考になる
- (5) カントという普遍妥当の世界である。I. Kant, *Kritik der praktischen Vernunft*. Vorrade. S.117-118, TI.1.Kap.1. §3.S.134-135, Kap.3.S.196-197.
- (6) 彼らは同一にして唯一のヴィジョンの下に我々の生の共存 (con-vivir) を描き出したのである。Kritik der reinen Vernunft, VII.XXX IV.XXX IX.S11.35.38. 183-184. Kritik der praktischen Vernunft.S.117-118.272-274.

6. 再び他者達と我について 彼女への短い旅 (Más sobre los otros y yo. Breve excursión hacia ella)

- (1) 我々の眼の前に他者がいるとは、「新しい存在=我 (ego)=他者 (alter)=他の自我 (alter ego)」, つまり「他我=非-我」といった矛盾を意味する。
- (2) Fuserl, *Cartesianische Meditationen*, §5.44-45.52-53. S.93-103.116-120. Ideen zu einer reinen Phänomenologie, §3-4.14.31.43.S. 33-34.61-64.89-91.228.
- (3) 他我の喜怒哀楽といった心情は、私の内部に見出されるのではなく、他我の中に見出されるものである。
- (4) この場合、「女性=人間=私 (男性)」の等置は、理論的誤謬に留まらず、抽象化による實在性の除去へ導く。なお、この説明の為に、V. ユーゴー『エルナニ』の中のソル嬢の言葉にみる女性的混濁を提示している。Victor Hugo, *The Atré I, Ce volume ,le cent, Soixante-Sixieme de Biblio Theque de la Pleiade*, III, pp.1297-1305 (NW). -典拠は筆者による。

7. 他者という危険並びに我という驚き (El peligro que es el otro y la sorpresa que es el yo)

- (1) オルテガは、“De esta manera nuestro analisis de la realidad radical que es la vida de cada cual nos ha llevado a descubrir que, normalmente, no vivimos en ella, sino que pseudo-decir, al vivir en sociedad.” という立場をとる。これは本講座のテーマでもある。
- (2) 即ち, “Lo peligroso no es resueltamente malo y adverso puede ser lo contrario, benéfico y feliz.” ということである。尚, 説明を補う為に, 諸種の語彙を比較提示しているが, 詳述を省く。
- (3) オルテガはフッサールの様に, 汝=もう一人の我 (alter ego) とは解さない。

Fusserl, Cartesianische Meditationen, §53, S.119-120. 典拠は筆者挿入

8. 突然人々が現れる (De pronto aparece la gente)

- (1) 例えば、無限な自我、超越的な無制約的な自我を考えた Friedrich Wilhelm Joseph von Schelling の見解である。岩崎武雄『カントからヘーゲルまで』東京大学出版会、1982年、47, 107 ページ。H. バウムガルトナー『シェリング哲学入門』、北村実監訳者、早稲田大学出版部、1997年、47.173-174 ページ。オルテガは、民族精神 (Volksgeist) という語彙は Voltaire (Francois-Marie Arouet), Essai sur l'histoire générale et sur les moeurs et l'esprit des nations. の中で暗示的に示したものの継承である記している (p.178)。
- (2) Émile Durkheim, Sociologie et philosophie, France, 1951, p.48. G. W. F. Hegel, Vorlesungen über die Philosophie der Geschichte, Reclam, Stuttgart, 1961, S.106ff (NW). 岩崎前掲『カントからヘーゲルまで』158-166, 182-184.

9. 挨拶に関する考察 (Meditación del saludo)

- (1) オルテガは、大方の社会学者達が、M. ウェーバーの教説の如く、「対個人的なもの＝社会的関係」との混同を犯してきたと捉えている。Max Weber, Wirtschaft und Gesellschaft, Grundriss der verstehenden Soziologie (J. C. B, Mohr Tübingen, 1976, S.14 (NW)).
- (2) 言葉の慣習に着目していえば、人々の話は "a la vez, un sistema de opiniones que la gente tiene, de opiniones públicas." といえるのである (p.194)。

10. 挨拶に関する考察。語源学的動物たる人間。慣習とは何か? (Meditación del saludo. El hombre, animal etimológico. ¿Qué es un uso?)

- (1) これこそ、ウェーバー、ベルクソンやデルケム然り、社会学者が慣習について述べていることである。M. Weber, S.15. Henri Bergson, Les deux sources de la morale et de la religion, Paris, 1933, pp.1-6 (NW). É. Durkheim, Les règles de la méthode sociologique, Paris, 1927, pp.11-13 (NW).
- (2) オルテガは、"Más da la casualidad que sobre el saludo no hay ninguna teoría correctamente formada. という見解に立っている。尚、ここでは、Spencer (Principles of Sociology, Greenwood Press, 1975.) や Rudolf von Jhering (Der Zweck im Recht, Leipzig, 1904, S.1-200.) 等の挨拶に関する文献を馬鹿げたものと指摘している。典拠は筆者提示 (孰れも NW)。

- (3) この部分は、文脈を勘案しながら、筆者流に纏めたものである。
- (4) オルテガは、"El error del siglo X VIII Fue creer lo contrario;que la sociedad y su funciones constitutivas –los usos- se forman en virtud de acuerdo contrato,etc." という見解を採っている (p.213)。

11. 人々の言説即ち言語。新たな言語学に向かって (El decir de la gente: la lengua. Hacia una nueva lingüística)

- (1) ここでは、"El hombre es, también y a la vez, naturalmente sociable, que hay en el siempre, mas o menos somnolento o despierta, un ansia de huir de la sociedad." と考えているのである (p230)。
- (2) 辞書や用語集の言葉は、可能性としての意義はあるが、抽象にすぎない。それらの著者は、書き記す言葉を誰に対しても或いは誰についても語っているのではない。つまり、用語集や辞書は、言語活動とは全く反対のものなのである (Colección 8. p.235.)。尚、言語学は、現在の言語を研究するだけでなく、その進化の歴史を探究さえすれば、厳格な意味での現実に呼応できると信じ、ソシュール (Saussure) が立てた "la lingüística sincronica" と "la lingüística diacronica" との区別はユートピア的で不完全であるという見解を加えている (p.248)。
- (3) "El choque fecundo del decir con el habla," と表現してもいる (p.252)。
- (4) 尚、この項目の末尾で、「言語活動＝人間の身振りのレパートリー＝我々の社会から来るもの＝各人間集団の表現動作＝慣習の総体」という等置に基づく各人間集団間の活力ある表現動作について述べている。

12. 人々との言説即ち「世論」、社会的「しきたり」。国家権力 (El decir de la gente: las <opiniones públicas>, las <vigencias> sociales. El poder público)

- (1) ここでの見解を補完する為に、諸種の言語を提示している。詳述は避ける。
- (2) こうした理由から、全て社会的なるものは個人的なるものとは異なる實在に他ならないといえる。

Ⅲ 『人と人々 (El hombre y la gente)』の内容整理

- (1) ( ) 内の数字は項目番号を示す。
- (2) V. ジャンケレヴィッチ『アンリ・ベルクソン』、阿部一智、桑田禮彰訳、新評論、1989年、8ページ (Vladimir Jankelevitch, Henri Bergson, PUF, 1959.)。
- (3) Voltaire, La Philosophie de l'histpire. 安斎和雄訳、ヴォルテール『諸国民の風俗と

- 精神について』, 歴史哲学, 法政大学出版社, 1990年, 20-21, 54-55 ページ。但し, 本稿では紙幅や論述次元を勘案して関係箇所だけ示すに留める。例えば, 第2項注(3), 第3項注(4), 第5項注(2)・(3), 第7項注(2), 第12項注(1)である。
- (4) 拙稿『覚え書き』(1)~(6)。
- (5) 本稿Ⅱ節Ⅰ注(3)。
- (6) 例えば, 全集(Œuvres D'Auguste Comte)の一部を示せば, Ⅰ(La préliminaires généraux et la philosophie mathématique), Ⅱ(La philosophie Astronomique et la Philosophie de la physique), Ⅲ(La philosophie chimique et la philosophie biologique), XII(Synthèse subjective ou système universel des conceptions propres. A l'état normal de l'humanité). である。使用文献は本稿Ⅱ注(3)に提示。
- (7) Comte, XI(Discours sur l'esprit positif).pp.1~65.
- (8) Spencer, The works of H. Spencer VII. Principles of sociology, II. pp.569-570.603-606. なお, The principls of sociology I, II, Ⅲ. では, 数学, 宗教, 生物・医学, 法律・政治・社会, 文学・芸術, 軍事・産業・経済, 等多岐に亘っている。XIV.The genesis of science, pp.65ff. 使用文献は本稿Ⅱ注(3)に提示。
- (9) Spencer, The works of H. Spencer XIII. Progress.pp.19ff.28.42ff. XIV. The genesis of science, pp.24-27.67ff.
- (10) Spencer, The works of H. Spencer VII. pp.569-570.XIV. pp.1-2.51ff. 尚, 清水幾太郎は, 自由放任の個人主義と有機体のアナロジーとは容易に調和しないと指摘している(『世界の名著』コント・スペンサー, 中央公論社, 昭和45年, 42ページ)。
- (11) Bergson, Les deux sources de la morale et la religion. 特に, 「生命の飛躍(élan vital)」という観念がこの作品全体に亘って散見される。使用文献は本稿Ⅱ注(3)に提示。
- (12) Bergson, ibid.pp.1ff.pp.24-103.105-222., 223-285.287-294.
- (13) 拙稿『覚え書き』(6)を参照せよ。  
『二源泉』岩波文庫, 昭和28年, 平山高次訳, 5-6 ページ。
- (14) I.Kant, Kritik der praktischen Vernunft. Vorrede. S.117-118, TI.1.Kap.1. §3.S.134-135, Kap.3.S.196-197.
- (15) T.Hobbes, Leviathan, Opera Opera Philosophica Ⅲ, Germany, 1966, pp.102-111. B.Spinoza, TTPCap16. 拙著『スピノザ思想の原画分析』289-293. ページ。Fusserl, Cartesianische Meditationen, §5.44-45.52-53.S.93-103.116-120.Ideen zu einer reinen Phänomenologie, §3-4.14.31.43.S.43. S.33-34.61-64.89-91.228.
- (16) 本稿Ⅱ.9. 注(1)。

(17) 前掲『スピノザ思想の原画分析』62 ページ。

(18) 本稿Ⅱ.8. 注(2)。

#### Ⅳ エピローグ

(1) 例えば、『覚え書き』(1) 170, (2) 195, (3) 194, (4) 141, (5) 155, (6) 139, ページでとった態度である。